

すると円堂が声をかける。

円堂「鬼道と佐久間からの正体だ、帝国に行く。」

全員「えええええー！ー！ー！？？？」

音無「本当に兄さんに会いに行くんですか！？」

そつ、まさに敵に直接会いに行くという。

速水「うわああ、何かされるんですよー！」

倉間「んなわけない。」

浜野「でもさあ、監督ってよくわからないしさあ……。」

とまあ色々戸惑いの声を上げてる雷門メンバーで……

神崎「うおおおおおー！鬼道様と佐久間様に会えるっ！ー！ー！」

会えるのかっ！ーうれしいっ！ー！

車田「・・・あれでか？」

董「・・・あ、はは・・・。」

単純「・・・（笑）」

円堂「だから夜遅くまでかかるぞ。」

董「じゃあ、優一兄さんの見舞いはあきらめようね。」

剣城「ハア・・・。」

それくらいでため息吐くな。

神崎「やったーっ！！！」

・・・神崎くん・・・。

会いたく・・・ないのかな・・・？

私もなんとなく・・・優一兄さんと神崎くんのお姉さんが仲がいいところを見ると・・・苦しい・・・。

速水「何かされるですよー！」

車田「んなわけねえだろっ！」

速水の心配は

的中・・・

しなかった。

佐久間「こちらだ。」

佐久間が案内する場所。

そこには・・・

久遠「……………」

音無「久遠監督っ!!」

久遠「久しぶりだ、円堂。」

円堂「はい。」

そしてその先に・・・

円堂「……………!響木さん!」

音無「雷門理事長!!」

十年前の懐かしい面々。

話によると、レジスタンス達に鬼道と佐久間は協力していたらしい。

そして、雷門が地区大会のホーリーロードで優勝していき、選挙で
イシドシュウジを落選させ、響木を新たな聖帝にし、新たなサツカ
ー界を築く……。

それが目的らしい。

その革命という名のかぜを起こすことができるのは

雷門。

雷門イレブンのみである。

それには地区大会で優勝しなくてはならない。

速水を除けば盛り上がっていた。

董「なーんかすごいことになっちゃったね。」

剣城「……………」

おい、無視か。

董「革命だつて！革命！！かつこいいなあ！！」

剣城「いいか、姉さん……！俺達は革命を起こすと同時に罪滅ぼしをしてんだよ！」

董「革命を起こすことが、罪滅ぼしにつながるじゃない！！」

あー、なんかウキウキというか……

正義ってやっぱり気持ちいい。

学校にて……

速水「ハア……。」

董「速水くん、顔色悪いね？具合……良くないの？」

速水「違いますよっ！……昨日のことを聞いて何も思わないんですか！？」

董「え……？」

速水「革命だなんて……無理に決まってるじゃないですかあ！」

董「そ、そんな……。」

ポジティブだなあ……。

速水「そんなこと……ただの中学生ができるわけがないじゃないですかあ！！！」

董「……そんなことないよ、皆で力を合わせれば……。」

速水「失敗したら何かされるんですよ！！！」

董「やる前から失敗から考えないでよ！！！」

速水「何かされてからじゃ遅いんですよ！！！！！」

なんてポジティブ……。

口は京介みたいに達者だな。

倉間「ビビり。」

速水「なんとも言うってくださいつー!」

部活動

皆が思い思いの練習をする。

異常なまでのテンションの浜野。

そこへ円堂の携帯が鳴った。

円堂「はい……、はい……!全員がシード!?はい、わかりました。」

全員「!」

音無「全員がシードって……!?!」

へえ……まあ……大変なこと。

車田「じゃあ……全員が化身使い……。」

剣城「それは違うな、シードだからって全員が化身を使えるわけじ

やない。」

董「化身は気の高まり・・・つまり精神とサッカーの上達さを比例してやっとなみ出されるものの。だからサッカーがいくらうまくたって、精神が強くなければ化身を生み出すことはないわ。」

2人の話を聞き、少し安心してる一同。

そして・・・本格的な練習が始まった。

松風「うおおおお!!」

松風の背中に黒いものが渦をまいていた。

剣城・董「（あれは・・・化身!?!）」

放課後

董「・・・神崎くん・・・。」

神崎「俺は・・・絶対・・・・・・・・。」

行かない・・・。

俺はサッカー革命を起こすのに・・・忙しいんだ・・・。

父さんがやっていた熱いサッカーを取り戻すのに・・・。

姉貴は邪魔なんだよ・・・。

海王戦！！大量シードの策略！（前書き）

このままだと本当にアニメにおいつくので、オリジナルな合宿回や
董のプレーを描くものを書いて、時間潰していきたいと思えます。
できたらイナズマジャンパンの誰かを出したい・・・。

海王戦！！大量シードの策略！

珍しく、京介が天馬くんの特訓に協力的だった。

やっぱり、あれは化身だったのかも・・・。

董「そろそろお昼よ」

車田「あ、そういえば、お昼持ってきてなかったなあ。」

神童「董・・・。」

董「大丈夫ですよ！12人＋6人分作ってきましたから・・・料理が得意なんで拓人の家の材料で作ってきました。」

速水「なるほど、だから練習に来てなかったんですね・・・。」

円堂「本当か!？」

董「でも・・・円堂監督・・・弁当持ってきてますよね・・・。」

円堂「あ、いや・・・これは・・・あははは。」

松風「（まさか、夏未さんに作ってもらってるんじゃない?）」

音無「（そうなのよ・・・。）」「

1人ずつ弁当を配る。

剣城「ま、糞まずいけどな。」

神童「おい、剣城!！」

神崎「食う前から言っな!」

皆が弁当を開ける。

速水「おおっ!おいしそうです!！」

浜野「おおっ魚が入ってんじゃん!!」

倉間「彩はいいが・・・後は味だな。」

霧野「食べてもいいか? 董。」

董「いいよ。」

全員「いただきまーす!」

松風「うわーっ!! ずっとごくおいしいですっ!! 秋姉と同じくらい・・・いやそれ以上に!!」

西園「おかわりしたいくらい!!」

神崎「剣城イー、お前はこんなおいしいもの毎日食べられるのか、幸せだな。」

剣城「・・・フン・・・。」

神童「おいしいよ、董。」

霧野「うわぁ！こんなおいしい弁当はじめてなくらい。」

速水「毎日こんなおいしい弁当食べたいです。」

倉間「思い以上にうまいな、これ。」

浜野「ううーん！！季節のさんま&卵焼きつまーい！！！！」

車田「これはいい神童の嫁だな。」

天城「これで元気が出るド！！！！」

三国「これを見習いたいくらいたせな。」

水鳥「すっげえうまいじゃん！！」

茜「フッフ、どうしたらこんなに料理がうまくなるの？」

葵「とってもおいしいです、董先輩！！」

音無「ほんととってもおいしいわね、あたしなんかよりも・・・。」

円堂「もぐもぐもぐもぐもぐ！！！！うまい、うまいぞ！！！！董っ！！！！」

堇「皆ほめすぎですよ……。」

円堂「さてと、海王戦に向けて！練習だ！！」

放課後

速水「無理ですよ……。無理なんです……。」

堇「速水くん。」

速水「堇さん……。」

堇「大丈夫！勝てるって！！」

速水「……。」

海王戦当日・・・。

バスの前

一乃「あ・・・あの!!」

そこには一乃七助と青山俊介がいた。

神童「一乃、青山・・・。」

円堂「？」

音無「元サッカー部です。」

青山「あ、あの・・・一緒につれていってくれませんか!!??」

全員「!!」

車田「退部したのに！何をいまさら・・・!!」

倉間「練習もなしに試合につれていけるわけねえだろ。」

と乗り気じゃない皆。

神童「わかった。」

霧野「神童!!」

神童「革命^{かせ}を起こすには、少人数ダメだからな……。」

董「拓人……。」

拓人「……優しいのね。」

遂に海王戦が開幕。

負けは許されない。

一乃と青山はベンチ。

キックオフは神崎。

神崎「よし……。」

ゴールに向かって突き進む。

「進ませないぞ!!」

神崎「くっ……。」

剣城「こっちだ!!」

神崎「ああ!!」

ボールを高くあげ蹴った。

剣城にパスが回った。

だが……

「行かせるか!!」

スライディングを決める。

そのままこっちのゴールへと向かう。

神童「天馬！！やらせないぞ！！」

松風「はい！！」

しかし、相手は高くジャンプしてかわした。

董「さすがシード……。一筋縄でいかないわね……。」

そしてゴールまで到達。

そのまま点が入った。

三国「くうっ……。！！」

再びキックオフ。

剣城と神崎のパス回しでゴール手前まで来た。

神崎「倉間先輩!! お願いしますっ!!」

倉間「ああ!!」

倉間先輩ならいけるっ!!

倉間「サイドワインダー!!」

必殺技を使う倉間。

しかしあっけなく止められ、

そのまま形成逆転・・・

2点、3点と・・・じょじょに奪われていく。

羽ばたけ！天馬の化身！

前半の終わりに剣城がデスドロップで決め一点は取れた。

前半終了し、円堂から告げられたのは・・・

G Kを松風にする。

円堂の考えがわからないメンバーだったが・・・。

松風天馬に期待をし、

後半が始まった。

神崎「天馬のところまでボールは行かせないぜっ!!」

神童「神崎!」

神のタクトで導いた。

神崎「化身をつか・・・っ!!」

DFが邪魔をする。

神崎「チッ・・・。剣城・・・!」

振り返りパスを試みるも・・・

神童と剣城はマークされていた。

董「まんまと化身使いはマークされてたわね。」

D Fは止められず、おのずとG Kまで来た。

神崎・西園「天馬っ!!!」

松風「（俺に・・・本当に・・・止められるのか・・・？）」

剣城「松風!!」

松風「・・・剣城・・・?」

剣城「サッカーを取り戻すんじゃなかったのか!!??」

剣城に声援が響いた。

松風「・・・よし!!うおおおおおーーーーっ!!!!」

ボールを蹴り返そうとする。

そこに背中に黒い渦が舞う。

円堂「・・・天馬はMFだから、真正面からボールを蹴ったことがなかった。」

董「じゃあ・・・!!」

円堂「真正面からボールを受けるところで化身を生み出せる。」

松風「うおおおおおーーーーっ!!!!魔神pegasus!!!!」

遂に化身が現れボールを蹴り返した。

神崎「やったじゃねえかあ!!!!」

ボールが回ってきた。

神崎「スマッシュファイヤー！！！！！」

ボールが炎を身にまとい、回転しながらゴールに突き刺した。

そして・・・

剣城「デスドロップ！！！」

同点に追いついた。

ボールが速水のところに転がってくる・・・。

速水「（化身が・・・。最初は無理だと思っていました・・・。けど・・・俺はただ、決めつけていた・・・。）」

速水「できるかできないか、やってみなきゃわからない！！！！」

速水「ゼロヨン！！！！」

F MとM Fを抜け、松風にパスをした。

董「速水くんっ！！」

やった、決めてくれた！！

松風がDFを抜けようとする。

松風「うおおおおおっ！！！！魔神pegasus！！！！」

DFを抜け、神童にパスした。

神童「フォルテシモ！！！！」

遂に追い抜き・・・

雷門が勝利した。

神崎・西園「やったああ!!!!天馬あ————っ!!!!!!」

松風「あはは、やったんだ・・・!!」

過去と重なる思い、そして合宿

神崎の家

聖也の母「どこで遊んでたの？火曜日はお姉ちゃんのところに行く約束よ。」

神崎「うるせーなあ……。今日は練習が長引いたんだよ。」

聖也の母「私が行った頃には京介くんと董ちゃん制服のままて病院来てたわよ。」

アイツら直行かよ！？ええ！？

神崎「あいつら……。早くに帰ってさ……。」

聖也の母「董ちゃんが今日は早く終わったって言ってたわよ。」

だあああああ！！！！董先輩真面目ですね、ほんと。

聖也の母「早く行きなさい、じゃないとサッカーさせないわよ！」

神崎「サッカーさせないって……。皆の迷惑になるじゃねえかよっ

「！！！」

聖也の母「なら早く行きなさい。」

めんどくせえ・・・。

あんな奴に・・・会いたくないんだよ・・・。

董「それで、来週、合宿なの！！楽しみい」

優「良かった。」

董「え？」

優「昔から人見知りが激しいから友達がほとんどいなかったけど、雷門に来て、董・・・明るくなったような気がする。」

剣城「彼氏もできたしな。」

ニヤリと笑った。

董「う、うるさいっ！ー！」

コンコンとノックの音がする。

聖子「・・・優一さん・・・あ、董ちゃんと京介くんもいたのね。」

剣城・董「・・・こんばんは・・・。。。」

聖子「・・・試合・・・見たわよ。」

董「あ、ありがとうございます。」

聖子「京介くん、かつこよかったわ。」

剣城「・・・。」

あれ・・・なんか視線感じる・・・。

そこには・・・神崎くんがいた・・・。

董「神崎くんっ!!」

聖子「聖也!？」

逃げ出そうとする神崎。

董「神崎くん!!」

神崎の腕をつかんだ。

神崎「・・・っ!」

思ったより董先輩の力強いな・・・。

さすがシードって・・・ところか。

無理矢理に神崎が病室に連れた。

神崎「董先輩・・・。」

董「いいのかなあ、円堂監督にこのこと話すよ?」

神崎「っ・・・。わかりましたよ・・・。」

聖也「あ、あのね、聖也・・・。」

神崎「なれなれしく聖也って呼ぶな!!」

董「姉弟なのに……。だったらどう呼ぶの？」

神崎「姉弟なんかじゃない!!」

うわぁ、……。FMって生意気多いな……。

董「聖子さん、弟なんかに負けちゃダメですよ。弟なんて生意気でバカで厨二病で……」

ガンッ

いった!?

足蹴られた……。

京介に……。

董「なあにFMの蹴りを女に入れるんじゃない!!……!」

蹴り返した

剣城「っ!!……てめー足痛めたらどーすんだよ。選手だぞ!!……!」

董「アンタが蹴ったからいけないのよ!!……!」

剣城「てめーがいけねえんだよ!!……!」

董「私に何も京介のことなんかいつてない！！！」

剣城「んだと・・・テメエ・・・。」

董「姉に向かってテメエって何よ？」

剣城「目の前にいる超ウザったい女のことだっ！！！」

董「名前は！！؟؟？」

剣城「剣城董！！！」

董「さつき悪口いったのは目の前にいる最低な男剣城京介！！！」

剣城「なん・・・」

優一「やめなよ！2人ともっ！！！」

あ・・・。

京介のせいだあああああっ！！！！！！

董「まあ、こんな感じでいいんですよ、聖子さん。」

聖子「あ・・・あはは・・・。」

はい、私が悪かったよ。

元は京介だけど。

神崎「……………」

董「姉弟なんて必ずしも仲がいいってわけじゃないんだよ。」

神崎「兄弟と兄妹はいいのに？」

剣城・董・優一「……………」

ほら、答えない。

本当は董先輩と剣城って仲がいいんだよ…………。

くそ…………。

神崎「帰るっ！！！」

董「…………神崎くんっ！！！」

聖子「待つて！！！」

聖子が追いかける。

階段を走る神崎。

それを追いかける聖子。

神崎「追いかけてくんなよ．．．わぁ!？」

足を滑らせた。

聖子「聖也っ!？」

ドンッ!!!

ぶつかった。

聖子「あ．．．あ．．．きゃああああっ!!!!!」

神崎「．．．姉貴．．．?」

全てが．．．スローモーションだった．．．。

ドンドンドンッ!!!

姉貴が．．．転げ落ちていく．．．。

スローだったからわかった．．．。

俺を上突き飛ばして．．．

庇ってた．．．。

声に駆け付けた三人。

董「っ……！聖子さんっ！？」

剣城「……っ！」

優「誰か……、先生……先生を呼んで……！！は、早く！！！」

董「あ……うん……！！！」

状況を聞けば・・・

神崎くんが足を滑らしたのを庇ってそのまま・・・。

そうか・・・あの日・・・なんだ・・・。

同じなんだ・・・。

聖子さんは集中治療室に運ばれ・・・

危ない状態。

神崎「俺は・・・。」

さすがに・・・気落ちしてるのかな・・・。

神崎「悪くない・・・。」

剣城「なんだと・・・？」

酷い・・・！！

神崎「・・・助けてなんて言っていないし・・・助けて方が悪いんだ
！！！！」

乾いた音が廊下に響いた。

私は・・・

神崎くんの頬を叩いてた・・・。

神崎「っ・・・!!」

董「・・・助けてなんて誰も言わないよ・・・。
・・・自分のため

に犠牲が出るくらいなら。」

だけど・・・

董「罪意識にさいなまれるのが普通じゃないの！！؟؟私達間違ってる！！؟؟？」

あ・・・どうしたんだ・・・董先輩・・・。

董「助けてもらったのにその人を責めるなんて・・・サッカーでの失敗を責めてるのと同じよ！！！」

神崎「う・・・。」

董「謝つてよ！！！！！」

また響く・・・董の声。

優一「（京介が帝国戦で運命の決着をつけたのなら・・・董の運命の決着は・・・きっとこれなんだね・・・。見せてもらったよ・・・。董の本心・・・。京介のこと・・・十分に任せられるよ・・・。）」

次の日、聖子の意識はいまだに戻らなかった。

サッカー塔

董「えっと・・・明後日の合宿に向けての予定表よ。」

マネージャーが配っていく。

予定

一日目

七時集合

七時半出発

バスで五時間かけて合宿

車内で昼御飯

一時から広いグラウンドで練習。

六時は晩御飯

七時は風呂

八時明日の予定確認

その後寝るまで自由時間

速水「（何も作者の合宿予定みたいになくても・・・）」

二日目

六時起床・集まり

七時朝御飯

七時半山登りに出発・弁当配布

十二時休憩・弁当

三時から同じように。

三日目

六時起床・集まり

七時地元の中学との練習試合・三校ほど戦う。

十二時休憩・昼御飯

一時から練習

六時以降は同じ。

四日目

六時起床・集まり・朝御飯

七時から海に出発

ビーチサッカーをする。

その他色々

その後は同じ

五日目

同じ

七時から練習

六時まで御飯をはさみ同じ

六日目

同じ

七時から練習試合

六時まで同じ日程

七日目

七時から六時まで休憩はさんで練習

八日目

七時から練習

一時に雷門に向けて出発

速水「最後らへんいい加減ですね．．．。」

浜野「海って釣りできるーっ！！！！！！！」

倉間「なんか微妙だな．．．。」

合宿、バスの中!!!

優一「聖子さんの意識、回復したよ。怪我もただの打ち身で・・・頭をぶつけた後遺症もないってさ。」

董「良かったあ・・・。」

優一「あれ？京介は？」

董「合宿の調整、一年生は初めてだから、結構時間かかってるの。」

優一「合宿か・・・。頑張ってね。」

董「うん。」

わくわくしてきた。

松風「合宿といえば・・・

神崎「青春!!」

松風「合宿といえば・・・

西園「バスの中!」

あれ・・・最期・・・変じゃない?

松風「バスの中といえば・・・

松風・西園・神崎「座席表————っ!!」

こうなつた。

円堂・音無
茜・葵

速水・浜野
董・水鳥

神童・霧野
車田・天城

剣城・松風 三国・倉間

西園・神崎 一乃・青山

円堂「よし、皆！覚えたか？」

音無「絶対に違う場所に座っちゃダメよ。」

合宿一日目

車内

わいわいわいわい

速水「ハア……。長くバス乗るんですかあ……。」

浜野「ちょー楽しみ！合宿う！！」

霧野「音無先生、俺と董を交換してあげてください。」

へえ……。？

音無「どうして？」

霧野「あと四年後に結……」

董「うああああ！！」

霧野の声がかき消された。

音無「なら、いいわよ♪」

董「先生！！」

剣城「頑張れよ、ね・え・さ・ん（ニヤリ）」

董「うつさいわ!」

こんな感じでバスの中が始まった。

円堂「バスは暇だろ?なら二組の席でマイクを回す・・・それで一発芸だ!!」

速水「一発芸ですか・・・。」

円堂「まずは空野達から。」

葵「はい、えっと・・・何しますか?」

茜「そうねえ・・・。シン様早撮り。」

カシャカシャカシャ

茜「三十枚できたあゝ」

葵「は・・・ははは・・・あはは・・・。霧野さん、水鳥さんお願いします。」

水鳥「どうする?霧野。」

霧野「そうだなあ・・・。」

水鳥「・・・そうだった・・・女装しろっ！女装！！スカートはけ！！」

霧野「うわああ、やめあ・・・」

この後蘭丸くんのやめアアアアッ

という運転の手元が狂うような叫びはおいといて・・・

蘭丸くんの姿は・・・

蘭丸くんは顔を真っ赤に染めて余計女の子らしくなった。

私よりかわいい・・・。

霧野「うああ!!も・・・もついいだろ!？」

茜「レアレアレア」↑高速撮り

全員「似合ってるう」

霧野「うわあああ!!罰ゲームじゃないんだからよお!!」

霧野「天城さんお願いしますう・・・。」

天城「元気だすド!!かわいかったド!!」

霧野「やめてくださいっ!!」

車田「どうする?天城・・・。一発芸なんて・・・。」

天城「お前にはあるド!!列車という必殺技が!!!!」

車田「は？」

天城「あとは任せたド！！前世は列車！！」

車田「シュポオ！！シュポシュポオ！！！！」

マイクからも蒸気が噴き出す。

遂に笑いの的になった。

そして順に流れていき、松風と剣城に回った。

松風「遂に来た……。どうしよう……。剣……。あつ……!」

剣城「ZZZ」

熟睡中だった。

松風「ああ!! 剣城……! 起きてよ……!」

董「甘いわよ、天馬くん……。京介ってば……。合宿行く気全然なかったんだよ。」

松風「そうなの?」

董「だってえ……。びよう……」

剣城「その先言ったら殺す……!」

董「ね、起きたでしょ。」

松風「あはは……。ねえ剣城……」

剣城「なんだ。」

めんどくさそうに言った。

松風「一発芸。」

剣城「お前がなんとかしろよ。」

松風「ええええつ。」

円堂「サッカーも協力！同じさ、剣城！！」

剣城「ハア……。」

松風「やるーよ、剣城ーっ！」

剣城「……うるせえ……。」

松風「やろうつて！！」

剣城「だからやらないって言うてんだよ！！！！」

松風「あはは、ムキになったあ♪」

董「あはは、あははははっ！！！！」

全員「はははは！！！！」

剣城「覚えてろよ……。次、姉さんたち！！！！」

マイクを投げた。

私の頭に激突。

董「あいた！！！！京介エエエっ！！！！」

神童「董……。剣城、姉だからってなんでもやっていいわけじゃないんだぞ！！」

剣城「はいはい、バカップルさん達。」

神童「なっ……。」

ちよつと……。拓人なんでそんな顔赤いわけえええ！？

董の必殺技披露！

バスは合宿場に到着、練習もし、晩御飯の時間になった。

円堂「今日の晩御飯はお好み焼きだ。」

速水「なんでお好み焼き……。」

倉間「形がよれよれのものじゃないとしたもの……。なんだこれ。」

浜野「ちゅーか、これはうまそうじゃん。」

神崎「なんでもいいから早く食いて……。」

松風「俺もお腹すきました。」

円堂「だれが作ったかわかるか？」

五人「無視!？」

董「誰って……宿の人じゃないんですか？」

円堂「それはだな・・・。」

浦辺「ウチが作ったんや。」

財前「あたしが作ったんだ！」

音無「！！」

円堂「俺が呼んだんだ。」

浦辺「ウチは浦辺リカや！」

財前「あたしは財前塔子だ、よろしくな。」

円堂「エイリア学園が襲ってきた時、イナズマキャラバンとして参加してくれたんだ。」

浦辺「ウチが作った・・・」

董「は、はい・・・。」

董「おいしいっ!!」

リカさんの方がおいしいけど・・・

財前「だろ、だろ？」

浦辺「さあ、必殺技を見せてみい。」

財前「ダメだな。まずはあたしが見せるんだ。」

なんかものすごい方向に向かっている・・・。

財前「練習場に行くぞ。」

ええええっ!?

董「まだ食べてませーん。」

財前「大丈夫!心配すんな!」

OP使われても・・・。

円堂「相変わらずだな。」（汗）

ここからはリカ・塔子と表示します。

塔子「ザ・タワー！！！！・・・どうだっ！」

地面からタワーが現れた。

董「かつこいいです！財前さん！」

塔子「塔子・・・でいいよ。」

リカ「ウチはリカでいいで！」

董「塔子さん・・・リカさん・・・。」

リカ「さあ、次は董の番やで、皆見とる！！」

全員「ジーっ。」

うわあああつ 拓人も監督も・・・音無先生も・・・先輩もつ！！！！
てか京介、私の必殺技知ってるでしょ・・・。

松風「がんばってくださいーい。」

神崎「董先輩の必殺技見てみたいでーす！！！」

水鳥「頑張れーっ。」

うう・・・あんまり期待しないでよ。

剣城「監督、姉さんはシュート技とブロック技の二つあります。のため、シュート技を誰に打たせてもらってください。」

円堂「じゃあ・・・」

松風「俺がやりたいです！」

神崎「俺が・・・!!」

倉間「でしゃばるな、一年。俺がやる。」

無理に倉間となり、準備する。

倉間「サイドワインダー!!!!」

必殺技が向かってくる。

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

オーロラがボールを止めた。

コロコロと力なく転がるボール。

倉間「くっ・・・!!」

円堂「すごいな、董！」

董「シードですから．．．。」

松風「俺もやりたいっ！！！マッハウインド！！！！」

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

マッハウインドも弾き返され、力なく転がっていく。

松風「あーあ．．．。」

塔子「すごいな！かっこいい！！」

そんなに褒められると．．．。

神崎「俺も．．．。行きます！！スマッシュファイヤー！！！！」

炎を身にまとい猛スピードで迫ってくる。

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

再び止めた。

神崎「嘘だろ．．．。」

円堂「董．．．。やるな。今度はシュート技か．．．。三国、董とPKだ。」

董「遠慮なくいきますよ。」

三国「ああ!」

董「行きますよ!オーロラフェニックス!!!」

オーロラが不死鳥の姿に変わり迫ってくる。

三国「バーニングキャッチ・・・うわあああ!!!」

三国き吹き飛ばされた。

車田「俺達より強いかな・・・。」

天城「男だけど負けたド・・・。」

塔子「チツ、チツ、チツ・・・。女だからってナメるなんてことはダメなんだ!」

田堂「そうだな、ホーリーロードも・・・女が出場できたらな・・・。」

肝試しで大騒ぎ

次の日は山登り・・・

夕食も終わり、昨日より余裕があった。

浜野「そうだ、皆で肝試ししない？」

車田「おお、賛成!!」

松風「大賛成です!!」

神崎「肝試しか・・・。俺全然怖くないぜ。」

速水「ええー!?き、肝試しですかあ・・・?俺、遠慮しておきます・・・。」

倉間「いいのか?皆行くんだぜ?」

浜野「1人、部屋にいるのか・・・?そんなことしたら・・・こわい・・・こわーい幽霊がああああああつ!!!!!!!!!!」

速水「うわあああああつ!!!!!!!!行きますっ!!!!!!!!行きますよう!!!!!!!!」

ふふ、速水くんかわいい・・・。

2人組で行くことになり、バスのペアとなった。

神童「董……。」

董「よろしくね、拓人……。」

神童「ああ……。」

松風「怖いよ、剣城ーっ！」

剣城「あーもう！べたつくなー！」

ヒュードロドロドロ

松風「ぎゃわああああっ！……！」

剣城を置いて逃げる松風。

剣城「全くよお……。肝試しなんかくだらねえ……。しかもこ
れただのこんにやくと人形じゃねえかよ……………」

飽きれつつも暗い道を1人で歩く。

かなり険しくなった。

剣城「…………この道かよ……………」

不安といっても道に迷った不安だった。

剣城「松風目……。あいつのせいで迷子かよ……。松風と同じ
道を歩いてるはずなんだけどな……………」

よくわからない木々。

剣城「一度戻るか…………？」

剣城「…………おんなじ場所に戻ってねーか。」

剣城「…………迷子かよ……………」

一方、堇・神童ペアは・・・

ヒュードロドロ

堇「きゃっ!!」

思わず神童の腕をつかむ。

神童「う・・・うあ・・・す・・・、すみ・・・れ・・・!!!!」

顔を真っ赤にしている神童をよそに

堇「きゃあああ!・・・あ・・・。」

うあ・・・あ、わ・・・わわわっ・・・私っ・・・!?!?

堇「ごめんっ！！」

腕を放そうとするが・・・

神童「このままでいいよ・・・。」

堇「っ・・・！！！」

神童「堇・・・。」

や、恥ずかしいっ・・・。無理、この状況保の・・・。

堇「ごめんっ・・・！！無理っ！」

神童「い、いや、無理させごめん・・・。」

なんだろ・・・このギクシャク・・・。

浜野・速水ペア

速水「今にも何かが出てきそうですねえー！」

浜野の後ろに隠れ、目をつむりながら震えている。

浜野「大丈夫だって！お化けなんて嘘さ、お化けなんてないさ♪寝
ぼけた人が見間違いたのさ♪」

速水「浜野くん、その歌の続き知ってるんですか？」

浜野「冷蔵庫に入れて、力チ力チに・・・」

速水「違いますよ！その歌の続き……。だけどちよつとだけちよつと怖いな……。って……。」

浜野「あーあ、せつかく気分を明るく……」

マルチプラットフォーム

2人「うわあああああつーーーー！！！！」

速水を置いて疾風ダツシュする浜野。

速水「ぎゃあああああああつ！！！！ずるいですよ！！！！浜野く……………ん！！！！」

一通り終わり・・・

円堂「天馬、剣城は？」

松風「・・・俺が置いてきちゃって・・・。」

音無「ダメじゃない。」

松風「ごめんなさい・・・。」

仕方ないな・・・。

董「私、天馬くんと探します。弟のことだし・・・。」

音無「本当？助かるわ。」

松風「剣城ー！」

董「京介ーっ！！」

呼んでも応答がない。

・・・合図・・・。

合図を送れば・・・。

・・・そうだ。

董「はああああー！！いでよ！化身！！勇者アウトレス！！！」

松風「っ・・・。これが董先輩の化身っ・・・！！！」

剣城「あれは・・・姉さんの・・・。・・・剣聖ランスロット
！！」

董「いた、あそこね、もう一度合図よ。天馬くん。」

松風「はい、はああああ！！魔神ペガサス！！」

その後合流、二日目終了。

三日目、一日付の練習・・・そして・・・

三日目・・・。

速水「海って・・・ビーチサッカーって・・・。」

円堂「お前達に紹介したい相手がいるぞ。」

本当のサッカー

綱海「よ、海のことなら俺に任せな」

神崎「あ、あなたはああああああっ！！！！」

疾風ダッシュで走り綱海の手を握る。

神崎「イ、イナズマジャパンのおおお！！！！」

綱海「・・・は・・・？」

円堂「いや、あの・・・おい、神崎！」

神崎「わつと・・・。俺は神崎聖也つています。」

・ 綱海「・・・あは・・・。まあ、よろしく。こんなこと海の・・・

円堂「というわけで！！海で体を鍛えるぞ！！！！」

綱海「無視かよ。」

董「……………」

なんかおもしろい人……。

円堂「皆！水着に着替えたな！」

綱海「さあ！バタ足だ！！水に抵抗しキック力と足を早くし、体力も作れる……。サッカーの練習に最適だ！！」

綱海は海に飛び込み……

綱海「バタ足……っ！！！」

全員、茫然。

円堂「バタ足だああ……！！」

バシャバシャバシャ

聖也「っ……！！バタ足だっ！！」

バシャバシャバシャ

円堂と綱海につられてやる聖也。

天馬・信助「バタ足……っ！！！！」

速水「……こんなでサッカーの練習になるんでしょうか……。」

倉間「さあな。」

速水「さあなつて……。断言してくださいよ、無駄つて……。」

浜野「おもしろいそうじゃん」

速水「浜野くん……。おもしろそうつて……。」

車田「何事もやってみることだな。」

天城「やるド！！海なんて久しぶりだド！」

三国「ああ！！」

速水「えええ……！！？」

剣城とマネージャー以外の一年は全員やっている。

浜野と三年も……。

倉間「速水……。お前、やんないのか？俺はやんないけどさ……。」

速水「ですよねぇ……。俺もやりませんよ。」

一乃「……。青山……。」

青山「霧野と神童もやってないんだし……。いいよね……。」

董「海！海♪」

剣城「ガキみてえだな、水着似合わなっ！！」

董「うるさーいっ！！！アンタの方が100倍似合わない。」

剣城「んだと！！؟؟？」

霧野「どうする？神童。」

神童「……どうしようかな……。。」

車田「2年――結構楽しいぞ！」

倉間「先輩が言うのなら仕方ない。」

速水「え……。ええ！？あ……。俺もっ！」

霧野「……。仕方ないよな、神童。」

神童「ああ……。。」

一乃「……どうする？ やってないの俺達だけだ……。」

青山「……先輩も言ってるし、仕方ないか。」

水鳥「そんなに嫌がるもんじゃねえだろ。」

葵「あはは。」

茜「シン様の水着姿……。素敵♪」

円堂「よし!!ビーチサッカーやろっぜ!!」

全員「ビーチサッカー!!??」

ビーチサッカーって・・・。

円堂「グラウンドより動きが鈍くなるから体力使うぞ!!」

浜野「一乃!」

一乃「あっ・・・。」

砂に足が埋まった。

一乃「う・・・うぁ!!」

そのままこける一乃。

董「一乃くん、大丈夫!？」

一乃「うん……。結構大変だな……。」

天馬「あつつい!!あつつつ。」

聖也「ここはマジあちっ!!!!」

信助「でもボールが!!」

綱海「走れ!!走れば大丈夫だあ!!」

皆がわいわいとしている中……

円堂「……皆楽しそうだな。」

音無「円堂さん、どうして綱海さんと……?」

円堂「……最近、革命だとかフィフスセクターで楽しくサッカーやってなかったからな。」

音無「……………」

円堂「思い出してほしかったんだよ、「本当のサッカー」を。」

音無「10年前のイナズマジャパンのFFI優勝・・・いえ、雷門イレブンのFFの優勝のころのサッカーは・・・こんな感じでしたよね。」

円堂「みんな、つらいことを忘れて楽しくサッカーに打ち込んでほしかった。10年前のような大騒ぎみたいな・・・でもエイリアはごめんだ。」

音無「あはは・・・10年前は兄さんのことでいっぱいだった・・・変わってしまった兄さんのことで・・・でも・・・サッカーで兄さんは・・・変わってたんじゃないって気づけた。」

円堂「・・・取り戻さなきゃな・・・。「本当のサッカー」を。」

ナチュラル参上！

速水「そういえば、試合って・・・誰と対戦するんですか？」

神崎「まさかイナズマジャパンとか!？」

倉間「お前、世界をなめてるだろ。」

神崎「フィディオさんとロココさんはかっこいいぞ!！」

倉間「（アホだな・・・。こいつ・・・。）」

円堂「さあ、対戦相手だ!」

神童「え・・・。」

そこに立っているのは・・・

董「雷門イレブン・・・。対戦相手は私の私軍・・・ナチュラル。」

松風「私軍って・・・。ということは・・・!?!」

剣城「奴等全員・・・シードだ!?!」

松風・西園「ええええー!?!」

「僕は、董キャプテンを追って、シードやめたんです。」

「私も。」

「よろしくな、雷門イレブンさん。」

皆ポカーンとしている。

剣城「・・・信じていいのか?シードは勝つためならラフプレーを問わない奴等だ。」

董「私は美しく、そしてかしこいチームよ。ラフプレーを使うシードは弱さを隠すため!本当に強いシードはラフプレーなんか使わない。・・・そして皆かしこい。目的を失った彼らはシードである必要はない。」

神童「・・・目的って?」

董「彼らの目的はサッカーを変えること。」

そこへ円堂が現れた。

円堂「イナズマジャパンの試合に感動した彼らは、人の価値を決めるサッカーをよく思っていなかった。」

董「それで、平等な試合をするフイフスセクターに従った。けど、彼らの本当の目的は円堂監督の時と同じように・・・人の価値が決まらない、そして試合設定を問わないサッカー。」

霧野「つまり、俺達と同じようにサッカーに革命を起こそうとしているのか。」

神童「実力は？海王戦の二の舞じゃないだろうな。」

剣城「いや、奴等は黒の騎士団よりはるかに強い。」

董「・・・さあ、試合の始まりだっ！！！！」

神童「・・・董、キャラ変わってない？」

剣城「フィールドに立つとああなるんだ。」

神童「そういえば、シードとしての董の目的って？」

董「それは・・・」

剣城「言ったら潰すッ！！！」

董「はいはい。」

試合が始まった。

神童「董のポジションはFMか。」

キックオフ。

剣城「行くぞ。」

神崎「ああ。」

パスをつなげていく。

董「・・・遅い・・・。」

剣城と神崎が董を抜いた。

神崎「！？ボールが・・・。」

いつの間にか董がボールを持っていた。

神童「来るぞ！！董を止めるんだ！！」

松風「はい！」

董「・・・・・・。」

しかしあっという間に切り抜けた。

神童「早い・・・！！」

霧野「おおおおお！！」

スライディングしてくる。

しかしジャンプでかわす。

霧野「董ってこんなに強かったのか!!」

もうゴール前。

董「オーロラフェニックス!!!」

七色のフェニックスがゴールに迫る。

三国「フェンス・オブ・ガイア!!!!」

しかし守りを崩し、得点した。

茫然とする雷門イレブン。

速水「ああ……。なんかあつという間の得点……。」

倉間「早すぎる……。」

再びキックオフ。

剣城「今度こそ!!」

倉間と剣城、そして神崎が四方八方のパスで惑わしつつゴールに近づいていく。

「アイスグラウンド!!!!」

神崎「えあ！？吹雪様の技！！！？」

地面が氷つつ倉間の動きを止める。

そのままボールを奪われ、再び董が・・・

剣城「させるかあああ！！！！剣聖ランスロット！！！！」

化身をだし、突っ込んでくる。

董「きゃあっ！？っ・・・。現れよ！！勇者アウトレス！！！！」

神童「姉弟の化身対決！！！？」

剣城「うおおおおっ！！！！」

董「はあああああっ！！！！」

ボールが空高く飛んだ。

董「しまった!!??」

西園「うおおお!!ぶつとびジャンプ!!」

必殺技がゴールに迫る。

「はあああ!!ゴットハンド!!」

円堂「・・・(ニコッ)」

神崎「円堂監督の技なんて反則だーっ!!」

止められた。

それから・・・

10-0でナチュラルが勝利した。

神童「・・・惨敗・・・。」

皆相当なショックを受けている。

董「だってさっきアイスグラウンドを使った雪佐田は吹雪さんの親戚だもん。」

神崎「は？」

董「ゴッドハンドを使ったのも円堂監督の親戚だもん。」

全員「ええええええええーっ！！！」

剣城「聞いてねエ！！！」

董「じ・つ・は」優一兄さんも知って・・・

剣城「てめえええええええっ！！！」

董「きゃー、拓人ー京介に襲われるー！」

神童「あははは。」

なんだかんだで楽しい合宿だった。

狩屋マサキ

合宿後の練習の再開後、

雷門イレブンのコーチとなった鬼道有人。

そして

松風「転校生の狩屋マサキって言うんだ！」

円堂「狩屋！サッカー・・・好きか？」

狩屋「ええ？は、はい！（でなきゃ入部しねーだろ！）」

董「・・・。」

そんなわけで練習でもDFとしてすごい実力を見せてくれた。

狩屋「ハンターズネット!!」

神崎「スゲーッな!狩屋!」

狩屋「あ、あはは・・・それほどでも・・・。」

私と京介はFMだからな・・・。

そのまま練習が続いて

天馬さんと狩屋くんがぶつかって・・・

松風「あたた・・・。」

神童「すごいじゃないか、狩屋!」

狩屋「そんなことは・・・。(ちよろいもんだぜ!)」

照れてる!素直でいいなあ!

董「それにくらべて！京・・・」

剣城「それにくらべて姉さんは攻め攻めだもんな！」

董「なっ・・・！？なあんですつてえ！！！」

霧野「狩屋、今のプレー・・・強引だっだぞ！」

「
狩屋「・・・チッ（なんなんだよ！俺に突っ掛かってくんないよ！！）」

秋空チャレンジャーズ・・・。

田堂監督が木暮さんから引き受けたらしい。

だからといって・・・

対戦相手が木暮さんって・・・

董「春奈さん、彼はイナズマジャンプのDFですよ？」

音無「ええ。」

イナズマジャンプが、しかも23の人が中学生相手にするなんて・・・
・（汗）

試合開始。

あ、京介は・・・

剣城「そんな面倒なものに参加するかよ！」

でいなくなりました！

神崎「攻めるぜ！スマッシュファイヤー！！」

得点した。

次はDFは動く。

だが・・・

ドン！

狩屋さんと蘭丸くんがぶつかつた。

霧野「うわああ！」

この時、霧野が足を踏まれたことは誰も知らない。

次の日

霧野「狩屋！」

狩屋「なんですか？霧野先輩？」

霧野「昨日の秋空チャレンジャーズのこと・・・俺、もう少しで足を痛めるところだった！」

狩屋「それで・・・？」

霧野「お前は・・・フィフスセクターから送り込まれたシードだろ！？」

すると・・・

神崎「霧野先輩！狩屋ー！」

董「どうしたの？」

狩屋「いや、霧野先輩に色々アドバイスもらっただ。」

松風「そっか！」

霧野「董、剣城。お前達、狩屋をどこで見かけてないか？」

董「え、ええ？なんでそんなこと・・・？」

剣城「狩屋がシードだと疑ってるんですか？」

そんな・・・。

董「狩屋くんはそんなことしない！」

霧野「でも実力も高いし・・・！」

剣城「だからといって、シードだとは限りませんよ。」

董「そうよ。狩屋くんはシードじゃない。」

霧野「つく・・・！」

一方

松風・西園・神崎「えええ！？狩屋がシード！？」

狩屋「って霧野先輩に言われたんだ……。……。それで……。・シードって何？」

松風・西園・神崎「だあああ！！」

西園「シードって言うのはフィフスセクターから送り込まれたエリートで、剣城もシードだったけど今じゃ、仲間だもんね！」

神崎「……。狩屋、心配すんな！いざっていうときは助けてやるから！」

狩屋「ありがとう。」

練習

霧野と狩屋が交わったとき、

狩屋「っ！ー！うあー！」

いかにもぶつかって倒れたようにする。

霧野「！？」

神童「狩屋！大丈夫か！？」

狩屋「は、はい・・・。」

力のない声。

車田「霧野！試合が近いんだぞ！」

霧野「でも！俺じゃない・・・！！！」

狩屋「もう大丈夫です・・・。」

神崎「狩屋・・・。」

ホーリーロード全国大会。

全員、フィフスセクターにしたがってきた学校。

相手は月山国光。

列車乗り場にて

神童「み、南沢さん！」

南沢「フン・・・。」

天城「南沢！！なんで月山国光にいるんだド！」

南沢「雷門にいと、内申書に悪いからねえ・・・。」

お互い、向かい合って列車に乗った。

試合開始。

攻める剣城と倉間と神崎。

その時、月山国光のキャプテンの掛け声でフィールドがガラ空きになる。

何も知らず攻めるFM達。

その時！

倉間「うわあああ！！」

神崎「倉間先輩！」

竜巻が発生し、倉間を巻き込んだ。

これがホーリーロード全国大会のフィールドである。

松風がフィールドの攻略を掴むも

得点されてしまった。

狩屋「霧野先輩！俺、シード……ですから。」

霧野「なあっ!？」

狩屋「なーんて嘘ですよ。」

霧野「くっ。」

狩屋「天城先輩。」

天城「？」

狩屋「霧野先輩はさっきのは天城先輩のせいだって……。」

天城「なんだド!？」

狩屋「よく陰口叩いてました。」

この言葉のせいでDFの連携は乱れていく。

鬼道「どうした、DF・・・。」

董「狩屋くんが来てなんかおかしい。」

点は獲得できたが、押された展開だった。

前半終了

鬼道「霧野！前半のプレー・・・チームの連携を乱している。」

チームに起きたことを理解する鬼道さんはさすがだなって思う。

霧野「チームの連携を乱しているのは狩屋です！」

鬼道「・・・。」

円堂「頭を冷やせ。」

霧野「！！！！」

神崎「狩屋……。大丈夫か？」

狩屋「う……。。」

神崎「……。霧野先輩……。。」

霧野に声をかけようとするが……

鬼道「余計なことはするな、神崎。」

神崎「は、はい……。！」

後半

月山国光の必殺技タクティクス、タクティクスサイクルに苦戦する。

しかし霧野の機転で巻き返す。

霧野と狩屋が協力して。

鬼道「俺も以前、気が合わない奴がいた。」

董「鬼道さん？」

鬼道「だが、奴とかかわって・・・わかってきた・・・お互いのことが・・・協力して、連携技を2つも身につけた。」

董「鬼道さんにそんなことが・・・。」

天馬が得点し、弱体化しているのがわかる。

董「これは・・・。」

鬼道「月山国光は強いチームだ・・・。だが、フィフスセクターにしたがつていて本当の意味で窮地に立たされたことがなかった・・・。」

董「・・・。」

鬼道「本当の実力が発揮されるのは窮地に立った時だ！」

・・・鬼道さん・・・めちゃくちゃかつこいいです！

南沢「くう・・・！このままでは・・・雷門を離れた意味が！！！」

たった一人で反撃しようとするが・・・

一人では何もできない。

しかし・・・

それを見た月山国光がフィフスセクター関係なしな、試合を試みる。

しかし、パスがまわったのは・・・

董「決めちゃえー！京介！」

剣城「はぁぁぁ！剣聖ランスロット！！」

剣城「ロストエンジェル！！」

剣城が最後にゴールし、勝利した。

霧野と狩屋は和解した。

雷門は南沢とも和解し、気持ちよい最後で終わった。

雷門、旧部室前

円堂「瞳子さん。」

吉良「狩屋くんのこと、任せてごめんなさい。・・・あの子、11歳
歳の時にお日さま園に来たの。」

狩屋の過去について話す、イナズマキャラバンとネオジャパンの監督、吉良瞳子。

円堂「豪炎寺・・・お前だったのか・・・。」

次の日、サッカー棟にて

神崎「新しい部員だつてさ！ははは！！」

音無「名前はなんていうの？」

輝「輝です。」

音無「名字は？」

輝「え、あ……えーとその……あのー……。」「
なんで隠すんだ？

輝「影山です！影山輝です！」

普通じゃね？

あら？

鬼道コーチと円堂監督と音無先生が凍り付いてないか？

鬼道・円堂・音無「……………」

なんで…………

影山って…………誰だ？

アイツが帰ってくる

円堂「か、影山って……。」

凍り付いていた円堂監督がようやくしゃべりだす。

輝「は、はい……。影山零治は僕の叔父なんです……。」

影山零治……

彼は雷門と帝国のことであれば、必ずかかわるだろう。

当初の帝国の監督、そして真・帝国での監督。

不動明王とのかかわりも彼の中でもある。

影山の下だからこそもちろん、不動明王との初対面は気持ちがいいものではない。

剣城「で、サッカーの実力は？」

輝「えっ・・・あ！！実はその・・・ボール蹴り始めて二ヶ月なんです・・・。」

速水「たった二ヶ月ですか！？」

狩屋「なーんだ、素人か。」

霧野「最初は誰だって素人だろ。」

練習ではほんとに素人な腕前だったが、

物覚えはよく、フォワードに適している。

董「雷門イレブンはフォワードは2人しかいないから控えにはぴったりね。」

次の対戦相手はイナズマジャパン、吹雪士郎がコーチを務める白恋中だと発覚した。

鬼道「白恋か……。」「

皆が練習に励んでいると・・・

円堂「！？吹雪じゃないか。」「

吹雪「久しぶりだね、円堂くん。」「

現れたのは白恋の吹雪だった。

神崎「あああっあの人が・・・

董「吹雪様♪!!」「

全員を払いのけながら吹雪につめよった。

董「私、吹雪様の大ファンなんです♪ポジションはフォワードとデ
イフェンダーです♪吹雪様にあこがれて・・・。」

円堂「・・・董・・・？」

剣城「・・・ハア・・・。始まったか・・・。」

吹雪によると、白恋はフィフスセクター手の落ち、雷門に助けを求
めていた。

吹雪から学んだ必殺タクティクスで戦うことになった。

当日、キャラバンの中

西園「そういえば、必殺タクティクスの名前・・・決めてなかったね。」

松風「狩屋、なんかある？」

狩屋「うーん・・・。ランランランニングとか・・・！」

・・・。

松風「ぷっ・・・。」

神崎「ぶはははははっ！！！！！！！！」

西園「あはははははっ！！！！」

松風「あはははははっ！！！！」

董「はははははっ。」

女子全員「ははははははっ！！！！」

そして・・・

全員「うわっははははははっ！！！！」

車内が大爆笑していた。

狩屋「な、なんなんだよっ！！！！」

顔を赤くしている。

董「狩屋くんって本当におもしろいね。」

吹雪「（相変わらず、雷門には変わり者が多いね。）」

鬼道「（変わり者というかバカなだけだ。）」

円堂「（2人とも・・・ひどすぎないか。）」

音無「（あはは・・・。）」

霧野「・・・はは、ざまあ・・・。」

円堂「霧野！？」

吹雪「……、雪村……。」

鬼道「どうした？吹雪。」

吹雪「いや、なんでもない……。」

吹雪「（どうしてお前が……。フィフスセクターなんかに……。）」

白恋との試合は厳しくなると想定できた。

理由は……

地面が氷り、滑りやすかった。

神崎「つとと。滑る……。」

しかし雪村にボールを奪われた。

吹雪「雪村っ!!」

雪村「アンタは・・・俺を裏切った!!アンタを・・・ずっと・・・待っていたのに・・・!!!!」

董「吹雪様っ!」

吹雪「雪村・・・。違っんだ・・・。」

董「吹雪様・・・?」

吹雪「雪村・・・。」

董「雪村?」

雪村「パンサーブリザード!!！」

三国「フェンス・オブ・」

しかし、必殺技が間に合わなく失点。

葵「ああ!!」

董「監督っ!!」

円堂「・・・。」

鬼道「必殺タクティクスをやるしかない。」

勝てるよね・・・必殺タクティクスの力なら・・・。

完成したんだし。

神童「行くぞ！」

松風・剣城「はい！」

何度もパスしながら進む。

神童「必殺タクティクス！」

松風・剣城「ダブルウィング！！！」

「・・・右だ。」

ドオオオン！！！！

しかし見抜かれ、止められた。

松風・神崎「うわあっ！！！」

神崎「つて・・・。」

松風「・・・。」

剣城「もう一回だ！」

神崎「ああ！」

しかし、必殺タクティクスは成功しなかった。

鬼道「・・・松風ではパスのスピードが遅いんだ。」

董「じゃあ・・・。」

円堂「必殺タクティクスは完成してない。」

遂に、雪村にボールが渡る。

雪村「うおおおおっ！！豪雪のサイア！！」

吹雪「雪村が化身を！？」

再び失点。

前半終了・・・

吹雪「・・・雪村・・・誤解なんだ・・・。」

雪村「・・・。。。」

神童「・・・どうすれば・・・。」

錦「おおおーーいー!!」

神童「!!錦!」

錦「間に合ったぜよ!」

軽く事情を説明、必殺タクティクス、地面の攻略をし、後半がスタートする。

神童「必殺タクティクス！」

剣城・錦「ダブルウィング！」

「・・・左だ。」

しかし、また防がれた。

剣城「・・・何故だ・・・。」

錦「いやぁー！やっぱりFMはかつてが違っぜよ！」

神童「え？」

錦「いやぁ向こうでMFの方が才能あるっていわれたぜよ。」

全員「・・・。」（汗）

水鳥「錦イ・・・。」

董「水鳥の彼氏っておもしろいのね。」

水鳥「彼氏じゃねーえよ!!」

輝「あの!」

鬼道「どうした? 影山。」

輝「僕にやらせてほしいんです!」

鬼道「・・・わかった。」

次は影山輝で挑戦。

神童「必殺タクティクス!」

剣城・輝「ダブルウィング!!」

「!!」

成功・・・

神崎「よっしゃ!! うおおお!!」

化身を出す。

神崎「聖霊フェアリー!!!!・・・フェアリーアロー!!!!」

得点した。

再び勢いづき・・・

剣城「はあああああ!!剣聖ランスロット!・・・ロストエンジン!」

再び得点。

「このままでは・・・。」

突然、交代し

大男が入った。

雪村がボールを奪い、シュートしようとするが・・・

「俺にやらせろ。」

雪村「何!？」

「監督の指示だ。」

雪村「……。」

仕方なくボールを渡した。

「おおおっ!!」

三国「やらせるか!」

三国がボールを奪うが……

「ニヤっ……。」

三国「うわあっ!!」

三国に負傷させた。

円堂「……。」

三国「大丈夫です、まだやれます。GKは俺しかいないんです。」

田堂「ああ、お前しかない。これからも！！だから今回は休め。」

三国「……。」

田堂「天馬！GK経験があるのはお前だけだ。」

松風「はいっ！！」

初心者の天馬のサポートをしつつ攻める。

狩屋「ハンターズネット！」

防ぎきれなかった。

狩屋「アッ！」

霧野「ザ・ミスト……。」

しかしぶつとばされる。

松風「つ……。」

神崎「やらせるかつ」

蹴り返した。

神崎「天馬！」

松風「ありがとう、聖也。」

神崎「へへ。」

雪村「くっ……。。」

この時白恋の人間の瞳の色は変わった。

もうフィフスセクターの指示には従わない。

と。

雪村「吹雪先輩……。アナタが正しかった……。。」

DFを切り抜け化身を出す。

雪村「豪雪のサイア！」

松風「魔神ペガサス！」

蹴ったボールを蹴り返そうとする。

松風「うおおおおおっ！！！」

吹雪「がんばれ！雪村！！」

董「ええっ！？は！？吹雪様！？」

しかし、松風が蹴り返し・・・

必殺タクティクスも成功、

神童「奏者マエストロ！」

神童「ハーモニクス！！」

得点に成功。

白恋に勝利した。

雪村「・・・吹雪先輩・・・。」

吹雪「またサッカーやろう。」

雪村「はい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2850v/>

イナズマイレブンGO もう1人のシード

2011年12月1日18時54分発行